

第187回定期演奏会

政府による「オミクロン株に対する水際措置の強化」を受け、「第187回定期演奏会」の指揮者レオシュ・スワロフスキー氏の来日が中止となりました。そのため、代わりまして小松長生氏が指揮を務めます。曲目の変更はございません。

予習は変更前の指揮者を予定して執筆されておりますが、曲目について解説がありますので、ぜひお読みください。

本日の定期は、我らが常任指揮者・角田鋼亮の凝りにこったプログラムをお楽しみいただいておりますが、セントラル愛知交響楽団の表現力に新たな視野を拓く若きマエストロに続いて、次回定期（年明けの1月28日になります）は、かつて当団の音楽監督としてオーケストラの音楽を深く耕し（2014～19年）、現在も名誉音楽監督として楽団との絆を大切にしてくださっているチェコの名匠レオシュ・スワロフスキーの登場です。

◆名誉音楽監督・スワロフスキー登場！

マエストロ・スワロフスキーは1961年生まれ。巨匠ノイマンのもとで学び、チェコやスロヴァキアの名門楽団でポストを歴任して録音も数々残すほか、ドイツや日本など広く活躍して、ドヴォルザークやスメタナなどチェコ音楽の真髄を熱心に紹介、喝采を浴びてきました。

そのマエストロとは2012年6月（第120回定期）で初共演したセントラル愛知響、ドヴォルザーク《スラヴ舞曲集》全曲という（演奏家にとってはかなり挑戦的な）プログラムでしたが、彼が引き出す音楽の豊かさに聴衆も楽員もすっかり魅了されてしまい、2014年春から音楽監督にお迎えしたという次第。

彼の音楽監督時代、セントラル愛知響はチェコの名作たちを（深い愛情と理解をもって）響かせることのできるオーケストラへ成長したのはもちろん、音楽的に（さらに！）豊かなオーケストラへと成長しました。

厳しいご時世のなか、年明けにまたスワロフスキーさんを無事にお迎えできることを願いつつ……次回の演目は、チェコ音楽でも世界トップクラスの人気を誇るドヴォルザークの交響曲第9番ホ短調《新世界より》をはじめ、マエストロの十八番ばかりです。

◆明るく走りぬける！スメタナの傑作で幕開けです

次回まずお聴きいただくのは、〈チェコ近代音楽の父〉とも呼ばれるベドジフ・スメタナ（1824～1884）の人気作、オペラ《売られた花嫁》序曲（1866年）。とても賑やかで、目の覚めるような疾走感に溢れた序曲は、一気に客席のテンションもあげてくれる傑作です。

とはいえ、このオペラ《売られた花嫁》全曲を観たことがある、というかたは少ないのでは。——実はスワロフスキーさん、2010年7月の東京都交響楽団の創立45周年記念特別公演で、このオペラ全曲をコンサート形式で上演しています。筆者も拝見したのですが、とても愉快で上質な演奏を通して、本作の音楽が傑作たるゆえんを噛みしめました。

タイトルこそ穏やかではありませんが、別に身売りの話ではありません。ボヘミアの農村を舞台に、親から望まぬ縁談を強いられている娘がおりまして、その恋人が、なんとかしようとして策略をめぐらせ……というコメディです。設定の一部に、現代の観点では不適切なものがあって、オペラとしての上演はなかなか難しいのですが、くいくいと明るく突っ走る序曲は長い命を保ち続けるでしょう。コンサートの開幕にもふさわしい名作です。

◆《チェコ組曲》に聴く、美しき誇りと魂と……

スメタナに続いては、アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）の《チェコ組曲》Op.39。

聴きやすくしみじみと美しい……牧歌的な雰囲気ですと心にしみてくるような、はたまた朗らかなダンスのリズムに惹き込まれてしまう、まさに逸品です。

チェコは昔から音楽文化の盛んなところでした。東方のスラヴ文化と、西方のゲルマン文化のちょうど真ん中にあたる地域ともあって、双方の影響を受けながら、独特の豊かさを育ててきたのです。

さらに、ヨーロッパの真ん中であっていろんな国に囲まれていますから、絶えず周りから脅威にさらされ続けてきました。他国の支配も受けて、独立への意識も強く持ち続けていました（先のスメタナの時代は、まだ独立を果たしていません）。

そんなチェコの人たちは、音楽を通して、民族意識を強く共有してきました。民族の魂をあらわす〈民謡〉の多彩さも大切にされ、ドヴォルザークをはじめ優れた作曲家たちが、民謡の豊かさを芸術音楽にも反映させていったのです。

その結晶のひとつ……ともいふべき《チェコ組曲》（1879年頃）は、5つの楽章からなります。牧歌的でのびやかなメロディがたまたま美しい前奏曲に続いて、ポルカやソウセツカーなどチェコの舞曲を採り入れた美しい曲が並びます。第4曲〈ロマンス〉の素朴な詩情、そして生き生きと精妙なフィナーレ……と、セントラル愛知響が積み重ねてきたチェコ音楽での表現力も存分にお楽しみいただけるはず。必聴です。

◆傑作《新世界より》の瑞々しい〈いま〉へ！

そして最後は、ドヴォルザークの交響曲第9番ホ短調《新世界より》（1893年）。チェコの大家として国際的な名声を得た彼が、遙か大西洋のむこう、新興国アメリカから招かれて、音楽院の院長として渡米していた期間に書かれた名作シンフォニーです。

アメリカのスピリチュアル（黒人霊歌）と故国の民謡とが不思議に似ていることに惹かれたドヴォルザーク（まあ民謡というのは得てして世界のどこでも似てくるものですが……）、アメリカ音楽の研究を進める中で、この新しい交響曲にもそれが反映することになりました。

ただ、タイトルに「より」とあるところがみそ。アメリカ音楽をそのまま作品化したわけではなく、チェコへの熱い郷愁が掘り起こした豊かな語法に、新世界アメリカが拓く新たな感性が込められて生まれた……いわば、熱い昇華というべきでしょうか。

この曲の第2楽章は、昔から日本でも《家路》という歌に編曲されて有名ですが、この楽章と次の第3楽章はもともと、アメリカの詩人ロングフェローが先住民族の英雄を主人公にして書いた、野趣あふれる叙事詩『ハイアワサの歌』からインスピレーションを得て書かれた……とされています（この叙事詩は、三宅一郎訳が美しい装丁で出版されています〔作品社、1993年〕）。

ドヴォルザークはアメリカ滞在中、この叙事詩をもとにオペラを書こうとしていたらしく、その素材をこちらの交響曲に反映させることになったらしいのです。さてどんなお話だったのか……交響曲を聴くにあって『ハイアワサの歌』を知る必要はありませんが、ドヴォルザークが憧れ、空想を広げた世界観がどんなものだったのか、読んでみると膝をうつことも多々。第2楽章の冒頭で金管楽器を中心に神秘的な和音が続くのですが、これはいわゆる「昔むかし……」と伝説を語り始めるときのような役割を果たしている、という捉えかたもできます。

このあたりをはじめ、ご興味あるかたは、Michael B. Beckerman "New Worlds of Dvorak : Serching in America for the Composer's Inner Life" [W.W. Norton & Company, 2003] がお勧めですし、その著者ベッカーマンが、《新世界より》などドヴォルザークの音楽と『ハイアワサの歌』を組み合わせ、作曲家が構想していた作品を（朗読と音楽という〈メロドラマ〉形式で）再現してみせたユニークな試みも、「Dvorak and America」というCDアルバムになっています[Naxos 8.559777]。

それはともかく——スワロフスキーさんはチェコの音楽家として、ドヴォルザークその人の時代から今に至るまで、チェコに蓄積されてきた大事な演奏伝統も深く知るマエストロ。その知見がどのように反映されて〈いま〉の音楽として瑞々しく響くのか……。ぜひ、その誇りと情熱とが昇華する瞬間を、生の演奏で直に体感してください。では、次回もこのホールでお会いいたしましょう！

やまの たけひろ 山野雄大

ライター[音楽・舞踊評論]。『音楽の友』『レコード芸術』『バンドジャーナル』各誌をはじめ雑誌・新聞への寄稿、テレビ・ラジオ番組での解説、CDライナーノート・企画構成、オーケストラやバレエ公演の演目解説、取材撮影など多数。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》司会・構成。

Profile

